

音速について

理想気体を考える。非粘性（流体摩擦無し）、非熱伝導、外力無し、外部熱源なしのとき、必要な基礎式は以下のように表される。

<質量保存則>

$$\frac{D\rho}{Dt} + \rho(\vec{\nabla} \cdot \vec{u}) = 0 \quad (1)$$

<運動方程式>

$$\rho \frac{D\vec{u}}{Dt} = -\vec{\nabla} p \quad (2)$$

<状態方程式>

$$p = \rho R T \quad (3)$$

熱力学の第一法則により、等エントロピー過程は次式で与えられる。

$$\begin{aligned} T ds &= du + p dv = 0 \\ \therefore dh &= \underbrace{du + p dv}_0 + v dp \end{aligned} \quad (4)$$

ここに、 s は比エントロピー、 u は比内部エネルギー、 v は比体積（密度 ρ の逆数）、 h は比エンタルピーである。比エンタルピー h と定圧比熱 c_p の関係式は、次式で与えられる。

$$dh = \left(\frac{\partial h}{\partial T} \right)_p dT + \underbrace{\left(\frac{\partial h}{\partial p} \right)_T}_{0} dp = c_p dT \quad (5)$$

式(4)の $dh = v dp$ を、密度を使って書き直し、実質微分に変換することにより、次式を得る。

$$\rho c_p \frac{DT}{Dt} = \frac{Dp}{Dt} \quad (6)$$

あるいは、式(4)の最初の式の第二項 $p dv$ は、式(1)を用いて

$$p \frac{Dv}{Dt} = p \frac{D}{Dt} \left(\frac{1}{\rho} \right) = -\frac{p}{\rho^2} \frac{D\rho}{Dt} = \frac{p}{\rho} (\vec{\nabla} \cdot \vec{u}) \quad (7)$$

と変形でき、さらに比内部エネルギー u と定積比熱 c_v の関係式は、次式で与えられるので、

$$du = \left(\frac{\partial u}{\partial T} \right)_v dT + \underbrace{\left(\frac{\partial u}{\partial p} \right)_T}_{0} dp = c_v dT \quad (8)$$

結局、式(4)の $du + p dv = 0$ より、次式を得ることができる。

$$\rho c_v \frac{DT}{Dt} = -p (\vec{\nabla} \cdot \vec{u}) \quad (9)$$

式(6)あるいは式(9)が、等エントロピー状態でのエネルギー方程式と考えられる。それらは以下と同等である。

$$c_p dT = v dp, \quad c_v dT = -p dv \quad (10)$$

それを示すために、両式から温度を消去し、積分すると、

$$\begin{aligned} \gamma \int \frac{dv}{v} &= - \int \frac{dp}{p} \\ \gamma \ln v + \ln p &= \text{const.} \\ p &= c_1 \rho^\gamma \end{aligned} \quad (11)$$

ここで、 c_1 は定数、 $\gamma = c_p/c_v$ は比熱比である。なお、ここまで状態方程式(3)は直接的には使っていないが、式(10)の両式の差をとれば状態方程式となる ($\because c_p - c_v = R$)。

次に、流体は静止で p_0 , ρ_0 , T_0 の一定状態に対して、微小変動を考える。まず、密度を

$$\rho = \rho_0 + \rho' \quad (12)$$

とすれば、式(11)より、二項定理を用いて圧力は以下のように近似的に展開できる。

$$p = c_1 (\rho_0 + \rho')^\gamma = c_1 \rho_0^\gamma \left(1 + \frac{\rho'}{\rho_0} \right)^\gamma \cong c_1 \rho_0^\gamma \left(1 + \gamma \frac{\rho'}{\rho_0} \right) = p_0 + p' \quad (13)$$

これより、

$$p' = c_1 \rho_0^\gamma \gamma \frac{\rho'}{\rho_0} = \frac{\gamma p_0}{\rho_0} \rho' = \left(\frac{\partial p}{\partial \rho} \right)_s \rho' \quad (14)$$

と書ける (式(14)の最後の等号の成立理由は、式(11)に因る)。ところで、式(1), (2)の線形化された方程式は、微小項どうしの積を無視することにより、以下ようになる。

$$\frac{\partial \rho'}{\partial t} + \rho_0 (\vec{\nabla} \cdot \vec{u}') = 0 \quad (15)$$

$$\rho_0 \frac{\partial \vec{u}'}{\partial t} = - \frac{\gamma p_0}{\rho_0} \vec{\nabla} \rho' \quad (16)$$

それぞれ、式(15)の時間微分および式(16)の発散をとり、速度変動を消去すれば、次の波動方程式を得る。

$$\frac{\partial^2 \rho'}{\partial t^2} = c_s^2 \nabla^2 \rho', \quad \left(\text{where } c_s = \sqrt{\left(\frac{\partial p}{\partial \rho} \right)_s} = \sqrt{\frac{\gamma p_0}{\rho_0}} = \sqrt{\gamma R T_0} \right) \quad (17)$$

ここに、 c_s は波の位相速度 (音速) を表す。変動速度、圧力、温度に対しても同様に波動

方程式が得られる．等エントロピー過程における音速 c_s は実際に観測される音速の値に極めて近いことが知られている．

参考までに，等温過程における音速を考えてみよう．微小変動を考え，式(3)の状態方程式を線形化すると，

$$p' = R \left(\rho_0 \underbrace{T_0'}_0 + T_0 \rho' \right) = R T_0 \rho' = \frac{p_0}{\rho_0} \rho' \quad (18)$$

これより，線形化された運動方程式は，

$$\rho_0 \frac{\partial \vec{u}'}{\partial t} = -\frac{p_0}{\rho_0} \vec{\nabla} \rho' \quad (19)$$

この式は，式(16)と比べて γ が含まれない．一方で，式(15)には変更はない．したがって，等温音速は，次式で与えられる．

$$c_T = \sqrt{\left(\frac{\partial p}{\partial \rho} \right)_T} = \sqrt{\frac{p_0}{\rho_0}} = \sqrt{R T_0} \quad (20)$$

空気の場合，比熱比 γ は 1.4 程度の値であるので，この等温音速は実測値よりかなり低い値をとる．